

Artist in Residence 2024

第1期アーティスト



マハブ・ジョキオ
Mahbub Jokhio

滞在期間 2024.7.12 - 9.21

1992年パキスタン・メラブール生まれ、ラホール在住。日常から歴史、詩学、政治、気候危機など、さまざまなテーマや素材を通して、イメージを生み出す過程と、それを受け入れることについて疑問を投げかける作品を制作している。



《とどまる線》2023年



レガ・アユンディア・プトゥリ
Rega Ayundya Putri

滞在期間 2024.7.8 - 9.30

1988年インドネシア・スラバヤ生まれ、バンドン在住。ドローイングの手法を軸として、近年では人類の進化やサイボーグ化された架空の未来の動植物を想像し、廃棄された電子機器とドローイングを組み合わせた作品を制作している。



《カラ動物博物館》2023年 Courtesy of Koganecho Area Management Center



エコ・ヌグロホ
Eko Nugroho

滞在期間 2024.8.24 - 9.21

1977年インドネシア・ジョグジャカルタ生まれ、ジョグジャカルタ在住。絵画、刺繍、彫刻、映像に至るまで、地域の伝統と都市環境に深く根ざしながら、ストリート・アート、グラフィティ、漫画の要素を織り交ぜた作品を制作している。



More Love Above The Peace #25 2024年 ©Eko Nugroho Courtesy by ART FRONT GALLERY

福岡アジア美術館では、1999年の開館当初から毎年アジアのアーティストを一定期間福岡に招へいする「アーティスト・イン・レジデンス」事業を実施してきました。

2024年度は、第1期を7月より開始。6名のアーティストとともに活動します。

詳しくはこちら



安田 葉
Yasuda Yoh

滞在期間 2024.7.1 - 10.2

1988年神奈川県生まれ、神奈川在住。近年のデジタル化により失われつつある伝統文化に強く興味を持ち、2019年からインドネシアの風文化や太平洋諸島の自然環境を研究し、持続可能な芸術表現としての風を制作している。



Yoh Yasuda x I Kadek Armita「風の密林」展示風景 2023年



浦川大志
Urakawa Taishi

滞在期間 2024.7.1 - 12.25

1994年福岡県生まれ、福岡在住。「現代の風景画（遠近法）」をテーマに、グラデーションの線やインターネット上に存在する画像などをモチーフに組み合わせた絵画作品を制作している。



《複数の風景（歩行する絵画）》2023年



上村卓大
Kamimura Takahiro

滞在期間 2024.7.1 - 12.25

1980年高知県生まれ、福岡在住。「彫刻とは何か」を問いながら、身の回りにあるものや、日常をともにしながら時間が経過した「他愛のないもの」に関心を寄せながら彫刻作品を制作している。



《すけべなこと》2022年

2022年度から「アーティスト・イン・レジデンス」事業は対象者をアジアだけでなく国内外のアーティストに拡張して展開中。多様なバックグラウンドのアーティストが互いに刺激し合って成長し、福岡から世界に羽ばたくことを支援しています。

また、市民との共同制作やワークショップ、対話などの美術交流に取り組み、現代アートやアジア美術、異文化に対する理解を育むとともに、国内外との人脈づくりを通して、福岡アジア美術館がアジア美術の交流拠点になることを目指しています。

第2期は10月～12月まで、2組のアーティストが福岡に滞在！

・ブルーノ・ルイズ

[1990年生まれ、メキシコ在住]

・杉原信幸×中村綾花

[1980年生まれ・1982年生まれ、長野在住]

詳しくは
次号にて

Fukuoka Asian Art Museum WINDS OF ARTIST IN RESIDENCE 2024

福岡アジア美術館 第22回アーティスト・イン・レジデンスの成果展

滞在アーティストたちの新作を展示します。

会場：Artist Cafe Fukuoka(中央区城内2-5)スタジオ、ギャラリー、グランド・スタジオほか

会期：2024.9.14[土]—9.29[日]

開館時間：11:00—17:00

休館：9.17[火]、9.24[火] 入場無料

同会場でギャラリー・トークも開催予定！

安田葉×レガ・アユンディア・プトゥリ×マハブ・ジョキオ

×エコ・ヌグロホ×浦川大志×上村卓大

日時：9.15[日] 14:00—17:00 入場無料・申込不要

※海外作家は逐次通訳あり

※詳しくは当館Webサイトをご覧ください

福岡アジア美術館の「アーティスト・イン・レジデンス」事業その背景には

あじびの「アーティスト・イン・レジデンス」事業には、滞在アーティストを支えるコーディネーターの存在が欠かせません。その名は「チーム・アペルト*」。総勢9名のチームが、アーティストの制作サポートや生活支援、スタジオ管理、展覧会の運営から広報活動まで全面的に支えています。

*「チーム・アペルト」は、株式会社西日本新聞イベントサービスが運営



Topics01

レジデンス事業を支える人たち

九州を中心とする各地でフリーランスとして活躍中のプロフェッショナルがチームとなり、あじびのレジデンス事業を支えています。メンバーの一部をご紹介します！

右から主任コーディネーターの宮本初音さん、コーディネーターの牧園憲二さん、月田尚子さん、徳永昭夫さん。ほかに、松尾美紀さん、齋藤一樹さん、城野敬志さん、江上賢一郎さん、木下貴子さんにお力添えいただいています。



主任コーディネーターの宮本初音さん

Topics02

Q&A リーダーに聞く3つの質問

Q1：これまでの活動は何を？

A：1980年代より福岡を拠点に街なかのアートプロジェクトやアートマップ制作、海外交流事業などの企画運営をおこなってきました。現在は六本松でアート拠点を整備しつつ、福岡アジア美術館レジデンス事業の主任コーディネーターを務めています。

Q2：レジデンスの魅力とは？

A：レジデンスは、作品が生まれ出る瞬間に立ち会えるということが大きな魅力だと思います。2022年度からのレジデンスは世界各地と日本国内、地元拠点のアーティストたちの相互交流も醍醐味です。ここから将来につながるネットワークが生まれています。

Q3：2024度へのメッセージを

A：これまでの3期制から、2期制となり濃いレジデンスになりそうです。コーディネーターも増え、さらに多方面でサポートをしていきます。半年間の滞在制作となる福岡作家の変化はとくに注目です！



https://faam.city.fukuoka.lg.jp

あじびニュースvol.94 2024年8月9日発行

企画・編集・発行：福岡アジア美術館 編集・執筆：後藤麻与・片桐絵都

デザイン：吉田朋史、桐原玲奈 [9P] 印刷：株式会社四ヶ所

〒812-0027 福岡市博多区下川端町3-1リバレインセンタービル7・8階 TEL 092-263-1100
7.8F, Riverain Center Bldg., 3-1 Shimokawabata-machi, Hakata-ku, Fukuoka, Japan

ギャラリー観覧時間 9:30-18:00(金曜・土曜は20:00まで) ※ギャラリー入室は閉室30分前まで

開館時間 9:30-19:30(金曜・土曜は20:00まで) あじびホール、アートカフェ等

休館日 毎週水曜日(水曜が休日の場合はその翌平日、8.14、8.21は開館)

年末・年始(12.26—1.1)



福岡アジア美術館

Fukuoka Asian Art Museum

あじびニュース

アジア美術の
深みへ誘う



ベストコレクションⅡ —しなやかな抵抗—

Fukuoka Asian Art Museum 25th Anniversary
Best Collection II :
Echoes of Resilience

本展では、既存の社会規範や美術の
在り方などに対し、鋭い批判精神を
貫きしなやかに抗ってきた、アジア
美術のスターアーティスト8名の作品
をご紹介します。



ルー・ヤン(陸揚) [中国]
無性のスーパーヒーロー
「子宮戦士」降臨!

性の境界を超えた無性のスーパーヒーロー「子宮戦士」が主人公。日本のサブカルチャーを源泉に、作者の独創的な世界観が炸裂したアニメーション作品。
《子宮戦士》2013-14年、アニメーション(11分20秒)

ホアン・ヨンピン(黄永祿) [中国/フランス]

ひざまづいた駱駝の剥製が
意味するものとは

鼻に針を通した駱駝がメッカを向いて跪き、その胸には聖書の一節が刻まれる。現代社会に対する作者の鋭い批判精神を表現した作品。
《駱駝》2012年、剥製標本、ラグ、針、コード



本展で初披露目!



アイシャ・ハーリド [パキスタン]

現代の女性の視点を織り込んだ
革新的な細密画

ブルカを被ったビーナスを描いた作品。
ジェンダーに関する疑問を投げかける。
《ビーナスの誕生》2001年、水彩、金箔・紙



ラシード・ラーナー [パキスタン]

「見ること」と
スペクタクルに
潜む危うさ

《パレードの間、すべての目は空を仰ぐ》
2004年、デジタルCタイププリント・紙、板



シルパ・グプタ [インド]

ゲームのような
仕掛けから
人間の欲望を暴く

《無題》2004年、インタラクティブ・ビデオ



リン・ティエンシヤオ(林天璣) [中国]

無数の糸玉に
縛られた自画像が
写し出すものとは

《第3号》2001年、写真、綿布、糸玉



リー・ダバオ [カンボジア]

自国の負の歴史を
批判しながら
「真実」そのものを疑う

《伝令》2001/2005年、写真、スピーカー



ホー・ズーニエン [シンガポール]

自国の歴史を独自に
紐解き失われた歴史を
再構築する

《ウタマ-歴史に現れたる名はすべて我なり》
2003年、乾筆インク、アクリル・画布、
ビデオ(23分)

2024.9.14 [土] — 2025.4.8 [火]

9:30—18:00 [土・土曜は20:00まで] ※ギャラリー入室は開室30分前まで | 休館日 | 水曜日、12.26—1.1 | 観覧料 | 一般 200(150)円 | 高大生 150(100)円 | ※9.4—9.13 アジアギャラリーは閉室します

福岡アジア美術館 アジアギャラリー [7階]
主催 | 福岡アジア美術館 協力 | 公益財団法人 福岡市文化芸術振興財団

#01

ベストコレクションⅡ

AJIBI Discuss あじびのこと話そう

推し作品と私。
あじび学芸員が
スターアーティストを語る。

アジア美術の深みにハマる

「ベストコレクションⅡ」のキュレーションに携わる栗原さんと、あじび学芸員歴21年の五十嵐さん。それぞれが考える本展のみどころとは？

五十嵐(以下 五) 今回の8名の作家の選定基準は？

栗原(以下 栗) パイオニア的存在や後進の育成に貢献した作家などを中心に、ジェンダーバランスにも配慮しました。

五 私たちの選定が現地での作家の力関係を変えることもありますよね。歴史背景や派閥も絡んで、なぜこの人だけが選ばれた？みたいなことにもなりかねない。

栗 そうですね。今回に限らず、どの声を取り上げるのか、それによってこぼれ落ちるものは何なのかを、常に意識するようにしています。

五 目玉の一つは新収蔵で今回は

初のお披露目となるホアン・ヨンピン
の《駱駝》だけど、それ以外で栗原さん
の推しは？

栗 アーイシャ・ハーリドの《ビーナスの誕生》。大学院の最初の授業で出会った作品で、伝統的なパキスタンの細密画の技法でビーナスを描くことの意味を読み解いていくうちに、アジア美術の深みにハマりました。しかもその授業をされていたのが、あじびの初代学芸課長を務めた後小路雅弘教授だったんです。

五 後小路さんはアジア美術の担い手を増やすために教育機関に出でいかれた方だから、教え子の活躍が嬉しいでしょうね。

栗 ちなみに大学での研究テーマをベトナム近代美術に決めたのは、五十嵐さんが企画した展覧会でブイ・シュアン・ファイの作品に一目惚れしたから。あじびが私を育ててくれた(笑)。



《パレードの間、すべての目は空を仰ぐ》
ラシード・ラーナーの個展、
モハッタ宮殿美術館、カラチ、2004年

作家のプロセスを辿れるのも
学芸員の醍醐味

五 同じパキスタンの作品だと、ラシード・ラーナーの初期の作品《パレードの間、すべての目は空を仰ぐ》も推したい。彼の作品は2004年の「Bangladesh Asia Art Biennale」にも選出されて、活躍の場を広げていった。

栗 学生の時に初めてこの作品をトリエンナーレで観て、爆笑しました。

五 爆笑したんだ(笑)。
栗 生殖の話ってオープンにできないムードがあるけど、この作品を観ていたら、なんでそんな風に考えちゃいけないんだろう?と思えてきて。未来もちゃんと提示してくれて、すごく元気が出ました。



「第11回Bangladesh Asia Art Biennale」の
パキスタン作家展示作家風景、シルパカラ・アカデミー、
ダッカ、2004年



五十嵐理奈

(福岡アジア美術館収集係長)
一橋大学大学院で文化人類学を
学び、刺繍布カンタの調査のため、
1年間Bangladeshの村に住む。
2001年にあじびの「ベンガルの刺
繍カンタ」展に携わったのをきか
けに、2003年より勤務。

アートと鑑賞者をリアルにつなぐ

五 あじびは福岡市美術館(市美)のアジア部門が独立する形で始まった美術館で、市美開館の1979年は、「アジアに現代美術はない」くらいに言われていた時代。その頃から福岡ではアジア美術に焦点を当てていたと考えると、感慨深いですね。

栗 あじび開館の1999年ですら、アジア美術はそこまで浸透していませんでしたよね。そんな中、いち早く現地に調査に行きネットワークを築いてきたとは…。

五 私が今後もっと力を入れたいのは、作家の顔が見える展覧会を行うこと。現代美術の作家は生きていることが多いので、つなぎ役になってリアルな伝え方をしていきたいですね。

栗 来館のハードルを下げることも課題だと思います。あじび内のアートカフェをセルフ学習スペースのような感じで利用してくれるアジアの留学生も増えたり、まずは気軽に訪れてほしいですね。そういえばこの間、*スクールプログラムであじびに来た子が「ミロのビーナスはどこですか?」と聞いてきたそうですよ(笑)。

五 かわいいけどね(笑)。
栗 ミロのビーナスはないけど、面白いものに会える場だと知ってほしい。「ベストコレクションⅡ」がそのきっかけになればいいですね。

栗 学生の人に初めてこの作品をトリエンナーレで観て、爆笑しました。

五 爆笑したんだ(笑)。
栗 生殖の話ってオープンにできないムードがあるけど、この作品を観ていたら、なんでそんな風に考えちゃいけないんだろう?と思えてきて。未来もちゃんと提示してくれて、すごく元気が出ました。



*スクールプログラム

学校と連携して、子どもたちがアジアの文化や美術に親しむあじびのプログラム。



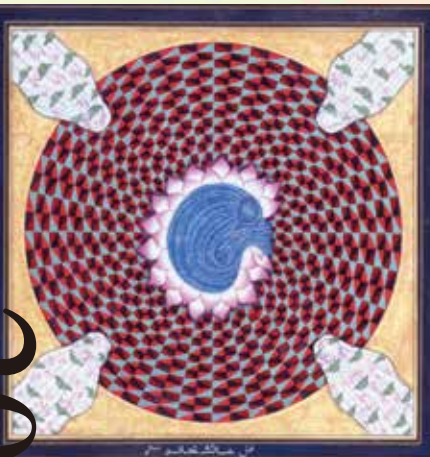
COLLECTION

アジアギャラリーにて開催される、2024年度9月～12月のコレクション展ラインナップ。

01 Fukuoka Asian Art Museum 25th Anniversary
Best Collection II : Echoes of Resilience

福岡アジア美術館開館25周年記念
ベストコレクションⅡ
—しなやかな抵抗—

9.14 [土]—2025.4.8 [火]
★詳細は左頁にて



アイシャ・ハーリド [パキスタン]《ビーナスの誕生》2001年

02 Fukuoka Prize (Arts and Culture)
Commemoration Exhibition: Kimsooja

福岡アジア文化賞受賞記念
キムスージャ展

9.14 [土]—2025.10.29 [火]
福岡アジア美術館の所蔵作家であるキムスージャが、第34回福岡アジア文化賞(芸術・文化賞)を受賞しました。それを記念し、当館が所蔵する作品《演繹的オブジェ》と作家の代表作である《針の女》(東京、北九州版)の計3作品を展示。さらに作家の関連資料とあわせてご紹介します。



キムスージャ [韓国]《演繹的オブジェ》1997年

03 Room for FAAM Residence Program Part II
Artists in Myanmar Today—Aung Ko

あじびレジデンスの部屋2期

ミャンマーの美術作家たち
はいま—アウンコー

9.14 [土]—12.17 [火]

10年余の民政期を経て、2021年のクーデターに揺れるミャンマー。自分の幼少時代や故郷をテーマに制作するアウンコーの作品をメインに、2009年の福岡滞在中の人々との交流の記録を公開。クーデターによりフランスへ逃れたアウンコーの、その後の活動も紹介します。



《アウンコーの村》2010—2011年

05 60th anniversary of the Normalization of
Diplomatic Relations between Japan and
South Korea: Realities in Korean Art

日韓国交正常化60周年記念

韓国美術のリアリティ

12.19 [木]—2025. 4.8 [火]

韓国初の実験映画を制作したキム・グリム、欧米の美術動向から独自の抽象絵画を発展させたキム・ファンギ、民主化運動のなか奔走したホン・ソングムなど。激動の時代をくりぬけた作家から若手作家まで、韓国近現代史を振り返りながら、韓国美術の魅力をご紹介します。



キム・グリム [韓国]《1/24秒の意味》1969年/1984年

06 Room for FAAM Residence Program Part III
Reflection of the City

あじびレジデンスの部屋3期

都市を映す

12.19 [木]—2025. 4.8 [火]

大きな変化を続ける天神の街。これまで福岡で滞在制作してきた美術作家たちは、その時々々の都市におけるモノや人の動き、建築を映しとってきました。今や世界で活躍するムン・キョンウォン(韓国)や、世界各地のレジデンスに参加するジョーリン(香港)らがこの地で作った作品を通じ、都市の変遷をたどります。



ムン・キョンウォン [韓国]《Stop it!》2005年

2024. SEP-DEC

SCHEDULE

AJIBI News

vol.
94

あじびニュース

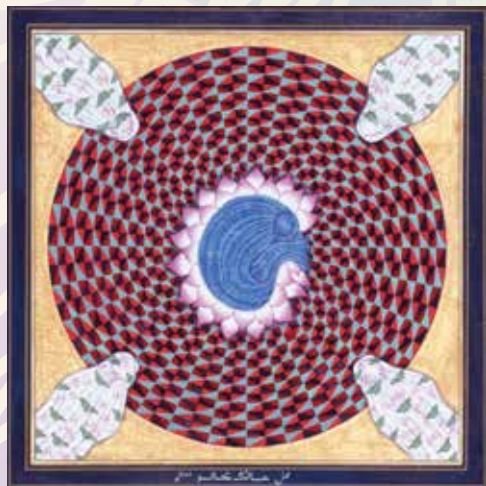
アジア美術の
深みへ誘う



福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum

ベスト コレクションII —しなやかな抵抗

本展では、既存の社会規範や美術の在り方などに対し、鋭い批判精神を貫きしなやかに抗ってきた、アジア美術のスターアーティスト8名の作品をご紹介します。



アイシャ・ハーリド [パキスタン]

現代の女性の視点を織り込んだ
革新的な細密画

ブルカを被ったビーナスを描いた作品。
ジェンダーに関する疑問を投げかける。

《ビーナスの誕生》2001年、水彩、金箔・紙

本展で初お披露目!



ルー・ヤン (陸揚) [中国]

無性のスーパーヒーロー
「子宮戦士」降臨!

性の境界を超えた無性のスーパーヒーロー「子宮戦士」が主人公。日本のサブカルチャーを源泉に、作者の独創的な世界観が炸裂したアニメーション作品。

《子宮戦士》2013-14年、アニメーション(11分20秒)

ホアン・ヨンビン (黄永砵) [中国/フランス]

ひざまづいた駱駝の剥製が
意味するものとは

鼻に針を通した駱駝がメッカを向いて跪き、その胴には聖書の一節が刻まれる。現代社会に対する作者の鋭い批判精神を表現した作品。

《駱駝》2012年、剥製標本、ラグ、針、コード



ラシード・ラーナー [パキスタン]

「見ること」と
スペクタクルに
潜む危うさ

《バレードの間、すべての目は空を仰ぐ》
2004年、デジタルCタイププリント・紙、板



シルパ・グプタ [インド]

ゲームのような
仕掛けから
人間の欲望を暴く

《無題》2004年、インタラクティブ・ビデオ



リン・ティエンミャオ (林天苗) [中国]

無数の糸玉に
縛られた自画像が
写し出すものとは

《卵 #3》2001年、写真、綿布、糸玉



リー・ダブー [カンボジア]

自国の負の歴史を
批判しながら
「真実」そのものを疑う

《伝令》2001/2005年、写真、スピーカー



ホー・ズーニエン [シンガポール]

自国の歴史を独自に
紐解き失われた歴史を
再構築する

《ウタマー歴史に現れたる名はすべて我なり》
2003年、転写インク、アクリル・画布、
ビデオ(23分)

2024.9.14 [土] — 2025.4.8 [火]

福岡アジア美術館 アジアギャラリー [7階]

主催 | 福岡アジア美術館 協力 | 公益財団法人 福岡市文化芸術振興財団

9:30—18:00 [金・土曜は20:00まで] ※ギャラリー入室は閉室30分前まで

休館日

水曜日、12.26—1.1

観覧料

一般 200(150)円

高大生 150(100)円

※9.4—9.13 アジアギャラリーは閉室します

※()内は20人以上の団体 ※中学生以下無料

AJIBI Discuss

あじびのこと話そう

#01

ベストコレクションⅡ

推し作品と私。
あじび学芸員が
スターアーティストを語る。

アジア美術の深みにハマる

「ベストコレクションⅡ」のキュレーションに携わる榎原さんと、あじび学芸員歴21年の五十嵐さん。それぞれが考える本展のみどころとは？

五十嵐（以下 五） 今回の8名の作家の選定基準は？

榎原（以下 榎） パイオニア的存在や後進の育成に貢献した作家などを中心に、ジェンダーバランスにも配慮しました。

五 私たちの選定が現地での作家の力関係を変えることもありますよね。歴史背景や派閥も絡んで、なぜこの人だけが選ばれた？みたいなことにもなりかねない。

榎 そうですね。今回に限らず、どの声を取り上げるのか、それによってこぼれ落ちるものは何なのかを、常に意識するようにしています。

五 目玉の一つは新収蔵で今回が

初のお披露目となるホアン・ヨンピンの《駱駝》だけど、それ以外で榎原さんの推しは？

榎 アーイシャ・ハーリドの《ビーナスの誕生》。大学院の最初の授業で出会った作品で、伝統的なパキスタンの細密画の技法でビーナスを描くことの意味を読み解いていくうちに、アジア美術の深みにハマりました。しかもその授業をされていたのが、あじびの初代学芸課長を務めた後小路雅弘教授だったんです。

五 後小路さんはアジア美術の担い手を増やすために教育機関に出ていかれた方だから、教え子の活躍が嬉しいでしょうね。

榎 ちなみに大学での研究テーマをベトナム近代美術に決めたのは、五十嵐さんが企画した展覧会でバイ・シュアン・ファイの作品に一目惚れしたから。あじびが私を育ててくれました（笑）。



「心の旅、ベトナム」展（2016年）に出品されていた作品、バイ・シュアン・ファイ《男性像》（制作年不明）伊藤豊吉氏蔵



あじび学芸課長時代の後小路雅弘氏（2000年撮影）



《パレードの間、すべての目は空を仰ぐ》ラシード・ラーナーの個展、モハッタ宮殿美術館、カラチ、2004年

五十嵐理奈

（福岡アジア美術館収集展示係長）
一橋大学大学院で文化人類学を学び、刺繍布カンタの調査のため、1年間バングラデシュの村に住む。2001年にあじびの「ベンガルの刺繍カンタ」展に携わったのをきっかけに、2003年より勤務。

作家のプロセスを辿れるのも学芸員の醍醐味

五 同じパキスタンの作品だと、ラシード・ラーナーの初期の作品《パレードの間、すべての目は空を仰ぐ》も推したい。彼の作品は2004年の「バングラデシュ・アジア美術ビエンナーレ」で初めて観たんだけど、会期は始まっているのにちゃんと展示されてなくて…（笑）。

榎 信じられない（笑）。

五 パキスタンからの発送が遅れたんでしょうね。

榎 当時はまだ駆け出しの若手作家だった彼が、今やパキスタン現代美術を代表するスターに。

五 関わった作家が飛躍するプロセスを見られるのも、この仕事の醍醐味ですね。



「第11回バングラデシュ・アジア美術ビエンナーレ」のパキスタン作家展示作業風景、シルバカラ・アカデミー、ダッカ、2004年



際どさの中に込められた未来

五 ルー・ヤンの《子宮戦士》も、際どいところスレスレをいくスリル感が面白い。彼女は2011年にレジデンスで福岡に来てくれて、3年後の「第5回福岡アジア美術トリエンナーレ」にも選出されて、活躍の場を広げていった。

榎 学生の時に初めてこの作品をトリエンナーレで観て、爆笑しました。

五 爆笑したんだ（笑）。

榎 生殖の話ってオープンにできないムードがあるけど、この作品を観ていたら、なんでそんな風に考えなくちゃいけないんだろう？と思えてきて。未来もちゃんと提示してくれて、すごく元気が出ました。



「第5回福岡アジア美術トリエンナーレ」図録のルー・ヤン掲載ページ

アートと鑑賞者をリアルにつなぐ

五 あじびは福岡市美術館（市美）のアジア部門が独立する形で始まった美術館で、市美開館の1979年は、「アジアに現代美術はない」くらいに言われていた時代。その頃から福岡ではアジア美術に焦点を当てていたと考えると、感慨深いですね。

榎 あじび開館の1999年ですら、アジア美術はそこまで浸透していませんでしたよね。そんな中、いち早く現地に調査に行き、ネットワークを築いてきたとは…。

五 私が今後もっと力を入れたいのは、作家の顔が見える展覧会を行うこと。現代美術の作家は生きていることが多いので、つなぎ役になってリアルな伝え方をしていきたいですね。

榎 来館のハードルを下げることも課題だと思います。あじび内のアートカフェをセルフ学習スペースのような感じで利用してくれるアジアの留学生も増えたと、まずは気軽に訪れてほしいですね。そういえばこの間、*スクールプログラムであじびに来た子が「ミロのビーナスはどこですか？」と聞いてきたそうですよ（笑）。

五 かわいいけどね（笑）。

榎 ミロのビーナスはないけど、面白いものに出会える場だと知ってほしい。「ベストコレクションⅡ」がそのきっかけになればいいですね。



*スクールプログラム

学校と連携して、子どもたちがアジアの文化や美術に親しむあじびのプログラム。



榎原ふみ

（福岡アジア美術館学芸員）
東京藝術大学で美術史を学んだ後、九州大学大学院にてベトナム近代美術を中心に研究。2019年から1年間ハノイに留学し、国民的作家のバイ・シュアン・ファイやベトナム文化への理解を深める。2021年より勤務。
※表紙に登場！

COLLECTION

EXHIBITION

アジアギャラリーにて開催される、2024年度9月～12月のコレクション展ラインナップ。

01 Fukuoka Asian Art Museum 25th Anniversary Best Collection II : Echoes of Resilience

福岡アジア美術館開館25周年記念

ベストコレクションⅡ ——しなやかな抵抗

9.14 [土] - 2025.4.8 [火]

★詳細は左頁にて



アーイシャ・ハーリド [パキスタン] 《ビーナスの誕生》2001年

02 Fukuoka Prize (Arts and Culture) Commemoration Exhibition: Kimsooja

福岡アジア文化賞受賞記念

キムスージャ展

9.14 [土] - 2025.10.29 [火]

福岡アジア美術館の所蔵作家であるキムスージャが、第34回福岡アジア文化賞(芸術・文化賞)を受賞しました。それを記念し、当館が所蔵する作品《演繹的オブジェ》と作家の代表作である《針の女》(東京、北九州版)の計3作品を展示。さらに作家の関連資料とあわせてご紹介します。



キムスージャ [韓国] 《演繹的オブジェ》1997年

03 Room for FAAM Residence Program Part II Artists in Myanmar Today—Aung Ko

あじびレジデンスの部屋2期

ミャンマーの美術作家たち はいま——アウンコー

9.14 [土] - 12.17 [火]

10年余の民政期を経て、2021年のクーデターに揺れるミャンマー。自分の幼年時代や故郷をテーマに制作するアウンコーの作品をメインに、2009年の福岡滞在中の人々との交流の記録を公開。クーデターによりフランスへ逃れたアウンコーの、その後の活動もご紹介します。



《アウンコーの村》2010～2011年

04 Asian Photo History

アジア・フォト・ヒストリー

10.31 [木] - 12.17 [火]

アジアで撮影された写真の約150年の歴史を、所蔵作品で振り返ります。19世紀後半に西洋向けに輸出された写真から、戦後の前衛写真、さらには多様な手法で撮影された「現代美術」としての写真までをご紹介します。



ライオネル・ウェント [スリランカ] 《シンハラ人漁師のトルソ》
1936-37年頃

05 60th anniversary of the Normalization of Diplomatic Relations between Japan and South Korea: Realities in Korean Art

日韓国交正常化60周年記念

韓国美術のリアリティ

12.19 [木] - 2025.4.8 [火]

韓国初の実験映画を制作したキム・グリム、欧米の美術動向から独自の抽象絵画を発展させたキム・ファンギ、民主化運動のなか奔走したホン・ソングムなど。激動の時代をくりぬけた作家から若手作家まで、韓国近現代史を振り返りながら、韓国美術の魅力をご紹介します。



キム・グリム [韓国] 《1/24秒の意味》1969年/1984年

06 Room for FAAM Residence Program Part III Reflection of the City

あじびレジデンスの部屋3期

都市を映す

12.19 [木] - 2025.4.8 [火]

大きな変化を続ける天神の街。これまで福岡で滞り制作してきた美術作家たちは、その時々都市におけるモノや人の動き、建築を映しとってきました。今や世界で活躍するムン・キョンウォン(韓国)や、世界各地のレジデンスに参加するジョリー(香港)らがこの地で作った作品を通し、都市の変遷をたどります。



ムン・キョンウォン [韓国] 《Stop it!》2005年

SCHEDULE

2024. SEP-DEC

Artist in Residence 2024

第1期アーティスト



マハブブ・ジョキオ
Mahbub Jokhio

滞在期間 2024.7.12 - 9.21

1992年パキスタン・メラブプール生まれ、ラホール在住。日常から歴史、詩学、政治、気候危機など、さまざまなテーマや素材を通して、イメージを生み出す過程と、それを受け入れることについて疑問を投げかける作品を制作している。



《とどまる線》2023年



レガ・アユンディア・プトゥリ
Rega Ayundya Putri

滞在期間 2024.7.8 - 9.30

1988年インドネシア・スラバヤ生まれ、バンドン在住。ドローイングの手法を軸として、近年では人類の進化やサイボーグ化された架空の未来の動植物を想像し、廃棄された電子機器とドローイングを組み合わせた作品を制作している。



《カラ動物博物館》2023年 Courtesy of Koganecho Area Management Center



エコ・ヌグロホ
Eko Nugroho

滞在期間 2024.8.24 - 9.21

1977年インドネシア・ジョグジャカルタ生まれ、ジョグジャカルタ在住。絵画、刺繍、彫刻、映像に至るまで、地域の伝統と都市環境に深く根ざしながら、ストリート・アート、グラフィティ、漫画の要素を織り交ぜた作品を制作している。



More Love Above The Peace #25 2024年 ©Eko Nugroho Courtesy by ART FRONT GALLERY

OVERSEAS



https://faam.city.fukuoka.lg.jp

あじびニュースvol.94 2024年8月9日発行

企画・編集・発行：福岡アジア美術館 編集・執筆：後藤麻与、片桐絵都

デザイン：吉田朋史、桐原玲奈[9P] 印刷：株式会社四ヶ所

〒812-0027 福岡市博多区下川端町3-1リバレインセンタービル7・8階 TEL 092-263-1100
7.8F, Riverain Center Bldg., 3-1 Shimokawabata-machi, Hakata-ku, Fukuoka, Japan

ギャラリー観覧時間 9:30-18:00(金曜・土曜は20:00まで) ※ギャラリー入室は閉室30分前まで
開館時間 9:30-19:30(金曜・土曜は20:00まで) あじびホール、アートカフェ等
休館日 毎週水曜日(水曜が休日の場合はその翌平日、8.14、8.21は開館)
年末・年始(12.26 - 1.1)

福岡アジア美術館では、1999年の開館当初から毎年アジアのアーティストを一定期間福岡に招へいする「アーティスト・イン・レジデンス」事業を実施してきました。2024年度は、第1期を7月より開始。6名のアーティストとともに活動します。

[詳しくはこちら](#)



JAPAN



安田 葉
Yasuda Yoh

滞在期間 2024.7.1 - 10.2

1988年神奈川県生まれ、神奈川在住。近年のデジタル化により失われつつある伝統文化に強く興味を持ち、2019年からインドネシアの風文化や太平洋諸島の自然環境を研究し、持続可能な芸術表現としての風を制作している。



Yoh Yasuda × I Kadek Armika『風の密林』展示風景 2023年



浦川大志
Urakawa Taishi

滞在期間 2024.7.1 - 12.25

1994年福岡県生まれ、福岡在住。「現代の風景画(遠近法)」をテーマに、グラデーションの線やインターネット上に存在する画像などをモチーフに組み合わせた絵画作品を制作している。



《複数の風景(歩行する絵画)》2023年

JAPAN / FUKUOKA



上村卓大
Kamimura Takahiro

滞在期間 2024.7.1 - 12.25

1980年高知県生まれ、福岡在住。「彫刻とは何か」を問いながら、身の回りにあるものや、日常をともにしながら時間が経過した「他愛のないもの」に関心を寄せながら彫刻作品を制作している。



《すけべなこと》2022年

2022年度から「アーティスト・イン・レジデンス」事業は対象者をアジアだけでなく国内外のアーティストに拡張して展開中。多様なバックグラウンドのアーティストが互いに刺激合って成長し、福岡から世界に羽ばたくことを支援しています。また、市民との共同制作やワークショップ、対話などの美術交流に取り組み、現代アートやアジア美術、異文化に対する理解を育むとともに、国内外との人脈づくりを通して、福岡アジア美術館がアジア美術の交流拠点になることを目指しています。

第2期は10月～12月まで、2組のアーティストが福岡に滞在！

・ブルーノ・ルイズ
[1990年生まれ、メキシコ在住]

・杉原信幸×中村綾花
[1980年生まれ・1982年生まれ、長野在住]

詳しくは
次号にて

福岡アジア美術館 第22回アーティスト・イン・レジデンスの成果展

滞在アーティストたちの新作を展示します。

会場: Artist Cafe Fukuoka(中央区城内2-5)スタジオ、ギャラリー、グランド・スタジオほか

会期: 2024.9.14[土]—9.29[日]

開館時間: 11:00—17:00

休館: 9.17[火]、9.24[火] 入場無料

同会場でギャラリー・トークも開催予定!

安田葉×レガ・アコンディア・ブトゥリ×マハブ・ジョキオ

×エコ・ヌグロホ×浦川大志×上村卓大

日時: 9.15[日] 14:00—17:00 入場無料・申込不要

※海外作家は逐次通訳あり

※詳しくは当館Webサイトをご覧ください

福岡アジア美術館の「アーティスト・イン・レジデンス」事業その背景には

あじびの「アーティスト・イン・レジデンス」事業には、滞在アーティストを支えるコーディネーターの存在が欠かせません。その名は「チーム・アペルト*」。総勢9名のチームが、アーティストの制作サポートや生活支援、スタジオ管理、展覧会の運営から広報活動まで全面的に支えています。

*「チーム・アペルト」は、株式会社西日本新聞イベントサービスが運営



Topics01

レジデンス事業を支える人たち

九州を中心とする各地でフリーランスとして活躍中のプロフェッショナルがチームとなり、あじびのレジデンス事業を支えています。メンバーの一部をご紹介します!

右から主任コーディネーターの宮本初音さん、コーディネーターの牧園憲二さん、月田尚子さん、徳永昭夫さん。ほかに、松尾美紀さん、齋藤一樹さん、城野敬志さん、江上賢一郎さん、木下貴子さんにお力添えいただいています。

Topics02

Q&A リーダーに聞く3つの質問

Q1:これまでの活動は何を?

A:1980年代より福岡を拠点に街なかのアートプロジェクトやアートマップ制作、海外交流事業などの企画運営をおこなってきました。現在は六本松でアート拠点を整備しつつ、福岡アジア美術館レジデンス事業の主任コーディネーターを務めています。

Q2:レジデンスの魅力とは?

A:レジデンスは、作品が生まれ出る瞬間に立ち会えるということが大きな魅力だと思います。2022年度からのレジデンスは世界各地と日本国内、地元拠点のアーティストたちの相互交流も醍醐味です。ここから将来につながるネットワークが生まれています。

Q3:2024度へのメッセージを

A:これまでの3期制から、2期制となり濃いレジデンスになりそうです。コーディネーターも増え、さらに多方面でサポートをしていきます。半年間の滞在制作となる福岡作家の変化はとくに注目です!

主任コーディネーターの宮本初音さん



滞在作家の活動拠点 Artist Cafe Fukuoka

福岡市中央区城内2-5

大濠公園と舞鶴公園に隣接するアーティストの成長・交流拠点(運営:福岡市)。元中学校舎を活用し、交流スペースや制作スタジオ、展示ギャラリーなどを併設。アートに関する相談窓口も設け、各作家の成長を支援しています。

※福岡アジア美術館の「アーティスト・イン・レジデンス」事業は、2022年度から活動拠点をArtist Cafe Fukuokaに移しています

